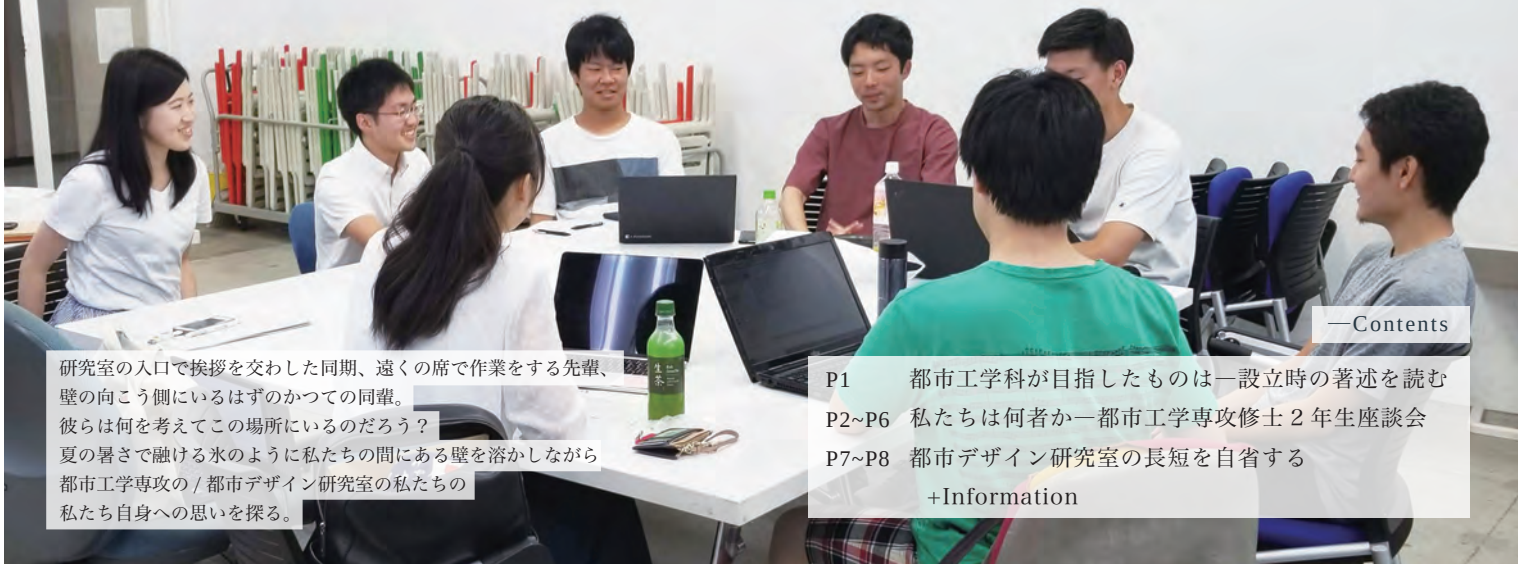
UrbanDesignLab.Magazine
都市デザイン研究室マガジン

境界を融かす 暑月の問い

Think of a Question As it Melts Our Boundaries in the Summer Heat.

vol. 281 /July. 31st 2019
7



研究室の入口で挨拶を交わした同期、遠くの席で作業をする先輩、
壁の向こう側にいるはずのかつての同輩。
彼らは何を考えてこの場所にいるのだろう？
夏の暑さで融ける氷のように私たちの間にある壁を溶かしながら
都市工学専攻の / 都市デザイン研究室の私たちの
私たち自身への思いを探る。

—Contents

P1　都市工学科が目指したものは—設立時の著述を読む
P2~P6　私たちは何者か—都市工学専攻修士２年生座談会
P7~P8　都市デザイン研究室の長短を自省する
+Information

都市工学科が目指したものは —設立時の著述を読む

text_MAEYAMA /M2

What the Department of Urban Engineering Aimed at -Reading the Writing at Establishment .

「もちろん、都市計画は経済・社会・法制などの分野の専門家、また建築・土木工学・衛生工学・造園などの技術者たちの協力によってなされることは当然のことであり、各分野の人たちはそれぞれの立場で都市計画の研究とその実施に貢献してまいりました。——しかし、それらを綜合し、具体的に、物的・技術的立案を計画する立場にたつ都市計画の専門家を欠いておりました。このことが、わが国の都市機能の混乱や、都市環境の無秩序さらに都市衛生の悪化などを来たしている大きな要因になっていることを認めざるを得ません。」
（『都市工学科設立趣意書』1961 年）

都市工学科は 1962 年 4 月に、それまでは建築学科で開講されていた都市計画の講座および土木工学科で開講されていた衛生工学の講座を独立させ、両者を合わせて一つの学科とすることで設立された。設立要請のために作成された設立趣旨文からは、当時の急速な社会の変化およびそれに伴う現実での課題に対応できる専門分野の不足が問題視され、都市工学科の設立が求められたことが分かる。

「とくに強調しておくことは、物的計画（フィジカルプランニング）の立場である。
——人間の諸活動……文化・産業・政治・教育……はどのようなものでもすべて物のレベルに投影される。」

「とくに最近および将来の都市問題と、その対策において、——すべてが飛躍的な科学技術の発展を前提としなければ何一つとして考えることができない。こうした意味で物的計画を躍進する科学技術の上にたって構成し、展開していこうとするのが都市工学（urban engineering）であると考える。都市の建設と維持に関係する諸技術の総称として外国で用いられている Municipal engineering とは異なっているゆえんである。」
（高山英華、川上秀光『都市工学科設立に際して』建築雑誌 77、1962 年）

当時から都市計画は建築や土木に限らず経済学や社会学、法学の専門家らが参加し議論されており、その中でそれぞれの分野を結び付け空間に落とし込む「物的計画」の技能を持つ人材が求められた。ここで都市工学が担おうとしていたのは単純な業務としての技術ではなく、急速に進歩する科学技術と社会の関係を描きながら将来を予測していく工学的な学問としての態度であった。

「フィジカルプランニングにおいても若い学生の間に教育され、訓練されるべき基礎があるはずであって、これが都市工学科の学部教育の対象となるべきものであろう。
——では都市工学、都市計画の分野で若い学生の教育するべき基礎は何か、ということになる。
簡単に言えば、都市現象、社会現象を技術的操作と対象とするために計量化する能力、つまり都市をとりあげて数学を駆使する能力をつけること、およびあらゆる社会現象、都市現象を空間化し、将来像を絵でえがきあげる能力である。」
（川上秀光『都市工学科の教育』建築雑誌 80、1965 年）

都市計画は都市に関わる様々な分野の応用であるという考えが主流であったことから、諸外国においては都市計画の講座は大学院から開講されることが多く、学部から都市計画の専門を設けることは特異であった。大学の制度上、学科を新設するには学部からの開設しかできなかったという背景もあるが、上記文中では学部から教育を開始する必要性は " 多分野で協議するだけでは確立できなかった統一的アプローチをフィジカルプランニングという立場をもって明確にする " ことと述べられる。そのために都市を定量的に把握し表現すること、またそれを根拠に空間像を描き提案すること、という２段階の技能が学部教育で身に着けるべき基礎とされ、現在もこの考えは引き継がれてきたカリキュラムの根底に残っているように思われる。

設立前後の文書を読み解くと、都市工学科では初めの学部教育から他分野を結びつけるための解釈の技術を学ぶことにも表れているように、既存の学問体系の中である種メタ的な立場に新たな専門を開拓することが目指されており、それが都市工学科の大きな特質であると考えられる。

私たちは何者か？
―都市工学専攻修士２年生座談会

Who Are We?
―Round-table Discussion with Master's 2nd Students in Department of Urban Engineering.

工学部都市工学科に進学してから、数々の課題に共に取り組み様々な議論を交わしてきた同期たち。大学院に進学しそれぞれの研究室で過ごすようになり、お互いのことを話す機会は大きく減ってしまった。彼らは何を思って大学院に進み、どのような考え方で学問に向き合い、何になろうとしているのか。研究室選択という分岐を経た私たちの違いは、あるいは共通するものは。

都市工学科より大学院に進学した修士２年生のうち計画系９研究室より７名、新領域創成科学科より１名の計９名で行った座談会と、修士２年生全体を対象に実施したアンケートの内容を紹介する。

（聞き手、編集：M2 前山）

座談会参加メンバー

＊研究室名括弧内は通称。
＊空間計画研究室のみ新領域創成科学科社会文化環境学専攻。他はすべて工学系研究科都市工学専攻。

地域デザイン研究室
（地デザ）
奥澤 理恵子

都市情報安全システム
研究室（防災研）
後藤 裕瑛

住宅・都市解析研究室
（解析研）
水谷 京弥

空間計画研究室
（出口研）
道家 浩平

都市デザイン研究室
（デザ研）
箭川 展

都市交通研究室
（交通研）
増田 泰知

国際都市計画・
地域計画研究室（広域研）
小原 寛士

都市計画研究室
（計画研）
秋月 優里

１．大学院進学と研究室選択

―初めに現在の研究室を選んだ理由を教えてください。

奥澤：都市工に来る前から被災地や復興のことに興味があったのですが、学部までではあまりそれに関することには取り組めなかったので大学院進学を決め、復興研究をしている地域デザイン研究室を選びました。

後藤：通称防災研、都市情報安全システム研究室所属です。正式名称は意外と知られてないです（笑）。僕ももう少し勉強したいなという気持ちが強く進学を決めました。研究室を選んだ理由は、生まれが仙台で震災のことも現実として知っていたので、津波避難とか復興について研究できないかな思ったからです。

水谷：進学を決めたのは３年生の時です。部活が結構忙しくて、就職をここで決めたら後悔するなというのが一番でした。僕はデザインとかはよく分からなくて、解析とかモデルとか数字を扱う方に惹かれ解析研を選びました。あとは単純に先生と相性が良かったかなと。

道家：僕は皆さんと違って新領域の所属です。就活もしてみたけどあんまり自分が何やっているかを説明できないなと思い、進学することにしました。新領域はいろいろな工学系の研究科の異端児というか”はしくれ者”たちが集まっている感じがあって。建築の構造系だけど意匠もやってたり、建築の意匠系なんだけどまちづくりもやっていたりとか。ちょっと変わったことをやってる人が集まっていて面白いなと思ったので進学してみようかなと。

箭川：僕も就活をしていました。でも必ずしも就職したい訳でもなかったので、就活を少しだけして上手くいかなかったし、大学院も楽しそうだからと進学を決めました。研究室を選ぶときに重視したことはその研究室の”人”です。やりたいこと自体も明確にはなかったので、先生の授業を面白いと思ったかとか先生の人柄を考慮して、最終的には憧れる先輩がいたので都市デザイン研究室を選びました。

増田：僕は理系ということもあり、大学１年の時から大学院進学は考えていました。実際都市工に入ってからも、やっぱり２年半で終わるのはもったいないなと。多分都市工の人は土木か建築のどちらに興味があるかで分かれると思うんですけど、僕は土木とかインフラに興味があったので、計画系の研究室で一番そこに近い交通研を選びました。

小原：僕も大学に入ったあたりから大学院進学は考えていました。「学部で卒業すると記憶が演習だけで終わってしまうのでは」という思いもありました。広域研を選んだのは、地区のデザインよりは広いスケールのところに興味があったから。広域研主宰の輪講も参加していて、雰囲気も分かっていたので比較的安心でした。英語が基本なのは引っかかりましたが、鍛える良い機会だろうとも思ったので頑張ろうと。

秋月：私は理転して都市工に来たのですが、同じように「理系なら大学院」と漠然と考えていてそのまま進学しました。都市計画研究室を選んだのは、数字を扱うよりは制度や計画を見る方が自分には合っていると思ったからと、他の研究室より扱うテーマの範囲が広くて何でもできそうだと思ったからです。

―アンケートの回答でも、「学部の内容では十分ではないと感じた」という人が約４分の３と多数です。

秋月：都市工に限った話ではないけど、東大はやっぱり２年の途中から専門に入るからそう思う人は多いかな。他大学の建築の友だちと話すと、やっていることに差があり過ぎるなと思うこともあります。

２．私たちの研究室の研究

―実際に研究室に入ってみて、自分の研究室で特徴的だと思うことはありますか？

水谷：解析研では、仮説をしっかり立てて検証するという理系らしい研究の進め方をする。仮説を最初に設定するのは僕はやりやすいです。印象だけど、都市工の他の研究室は先に枠組みを作るのではなく、調査や分析をしていくうちに論ができるという進め方が多い気がするので、それは特徴かな。研究室会議でも「その仮説がどのくらいあり得そうか」と「その研究が社会的にどう役に立つか」を主に議論します。

道家：僕の研究室もそれに近い。科学的に研究するということが重視されています。都市工や建築の研究では、対象地を決めてケーススタディをするものが多いけど、そうではなく、生物学とかのようにサンプルを集めて検証していく方が良いのではという考えが研究室にある気がします。

秋月：計画研も研究室会議では仮説や研究の社会的意義の話をよくするけど、実際やっていることは解析データを重視する研究とはちょっと違う。ヒアリングなどから情報を集めていく方法だと、「数値として何以上だからこう」というようには言えないし、必ずしも数値を扱うものと同じようにはいきません。

箭川：先の話に出ていたように、デザ研は仮説を先に立てるというよりは、手を動かして考えていくほうが多い。仮説にはなっていないような「こういうことが気になる」みたいな興味を、じゃあどう考えていこうかと議論する。僕たちのやりたいことを先生方がサポートする感じかな。

―デザ研の会議では「結局何がやりたいんだ」「あなたの想いは何なんだ」という話をすることが多いですね。

後藤：僕の研究室もそれに近いかな。テーマを決めるのにすごい時間がかかる。卒論で５カ月くらいかかった。

小原：広域研は社会への影響を特に意識している感じがします。例えば、地理学的に現象を報告しても、「あなたはそれを良いと思うのか？」「社会にとって意味があるのか？」と先生方に聞かれる。

増田：僕の研究室では、何をやりたいかが重視される一方で、学生一人一人がやっている研究が本当に学術研究足りえるかということが特に意識されています。既往研究の中でどの立ち位置にあってどういう新しさがあり、どういう有用性があるのかということを問われます。あまり実務に寄り過ぎると、「これはコンサルとかが仕事でやることで学術がやるべきことじゃないね」とか。

奥澤：この間知り合いと話していて「あなたの研究は仮説検証型と作品型のどっち？」と聞かれて。私は「作品型です」と答えたんだけど、聞いていて仮説検証型の人もいるんだなと思いました。私の研究室では、最初は枠組みをどうしようということはあまり重視してないけど、先輩とかがジュリーで他の研究室の先生にそこを質問されているのを見ると、初めから枠組みをしっかり持っているのも良いのかなと思うときもあります。

―研究の進め方についての話になりましたが、自分や他の研究室についてどう思いますか？

増田：僕の研究室では学術的な新規性が重視されると話したけど、それにも長短はあるような気がします。新規性の出し方には大まかに「昔から考えられてきたことに新しいアイデアを持ち込む」のと交通で言えば自動運転のような「新しい分野で挑戦する」の二つがあると思うのですが、学部や修士の学生が前者の方に取り組み成果を出すのは難しくて、新しい分野の方を選ばざるを得なくなる。学術としての新規性が必要なのは分かっているけど、必ずしも皆が研究者になる訳ではなく就職する人も多いことを考えると、自分の興味や将来に関わるテーマを選ぶことが許容されても良いのかなとも思います。

箭川：交通のようにある程度分野の幅が限られていると自分の分野全体の流れを把握しやすいし、みんなで一つの体系を受け継ぐということを考えやすいのかな。デザ研ではそれぞれが考えるテーマがばらばらで、体系をつかむということが難しい。

秋月：計画研もマスタープランなど中核となるテーマはあるけど、実際学生が取り組んでいるテーマはばらばらで幅広い。研究においても違う研究室の先生に話を聞きに行ったりとか。

―計画系の研究室は、自由度の差はありますがどの研究室でもテーマは自分で設定しますね。テーマの引き継ぎや指定はあった方が良いと思いますか？

秋月：どっちもどっちかな。私は幅広いのがいいなと思って研究室に入っているけど、多少縛りがある研究室も経験してないからこそ、少し憧れがあります。

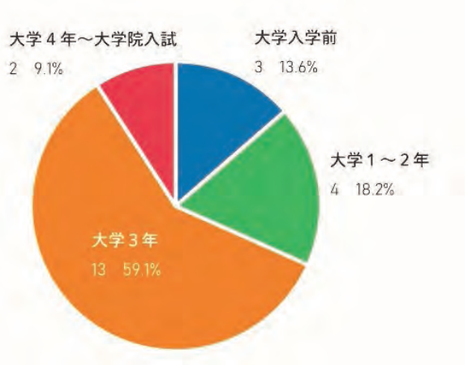
箭川：個人単位で見るか研究室単位で見るかで違う。研究室として大きな成果を出せるのはテーマを引き継ぐ方だとは思うけど、増田くんが言ったように修士で就職する人も多い中では自分のやりたいテーマを自由に設定できる方が個人単位では最適。ただ、それだとたまたま優秀な人が成果を出すということはあるだろうけど、研究室として確実に大きな成果を残せるようにはなってない。

道家：他学部などの友人の話を聞いていると、あんまり興味のないテーマから自分の研究テーマを選ばないといけないことがあるらしくて。それで

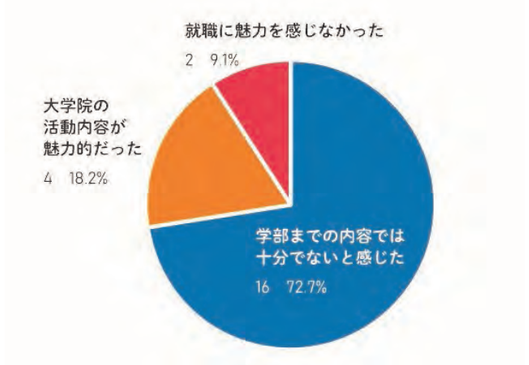
学生アンケート

・都市工学専攻計画系および新領域創成科学研究科社会環境工学科空間計画研究室に在籍する修士２年生を対象に実施
・回答数は 22/34 人、回答率 64.7%

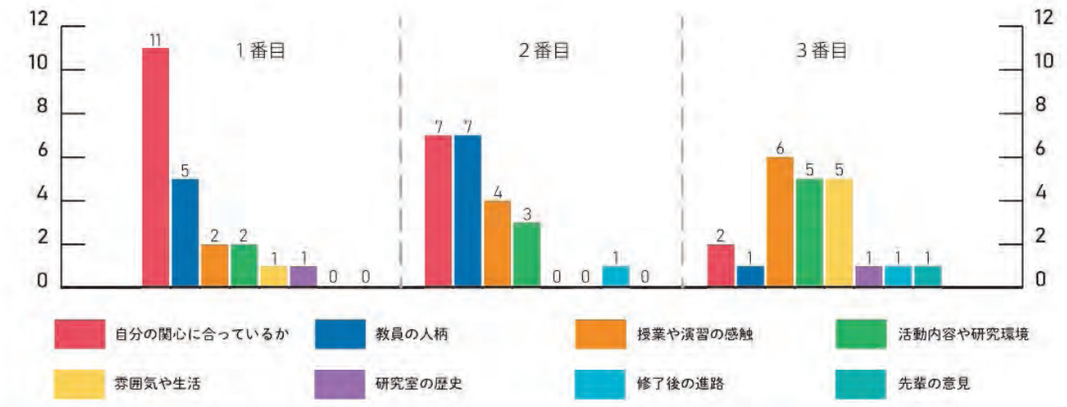
Q１．大学院進学を決めた時期は？



Q２．大学院進学を決めた理由は？



Q３．研究室を選ぶ際に重視したことは？（当てはまるものを順に３つ選択）



終電まで実験とかをやらなくちゃいけなくなるのは、やりたいことをやっていて終電まで作業するのと全然意味が違うだろうなと思います。

奥澤：ただ、自分でテーマを設定すると、自分の興味や価値観をすごく問われますよね。ちょっとそれが苦しくなる時もある（笑）。研究と自分の価値観が切り離せない。社会にとって良いかどうか、自分がどう思うかを常に問われている。

水谷：僕の研究室もテーマは自分で持ってくるけど、価値観についてはあまり議論しない。事実を淡々と検証する感じ。科学的な検証においては価値観を持ち込む必要はないかなと思います。

―進め方として、初めに枠組みを決める「仮説検証型」と積み上げて論を立てていく「作品型」のどちらか、また、事実の検証を主にするか、個人としての興味や価値観に重きを置くかという違いが見えてきました。

道家：枠組みを重視する「仮説検証型」でやっていると、興味を探りながら進めていく「作品型」は楽しそうだなとは思います。僕は進め方がはっきりしている方がやりやすいですが、最終的なアウトプットの差はそこでは出ないかなと。論文を読んでいても「仮説検証型」にしろ「作品型」にしろ、面白いなと思うものもそうでないものもあります。

箭川：「仮説検証型」の方が客観的に示されているから納得しやすいというのはあるけど、ただ仮説があって検証した、というのは個人としては面白いとは感じないかな。「仮説検証型」でも価値観が表れていて、そこから始まっている研究が面白いと思う。

小原：広域研は「仮説検証型」に近いと思いますが、確かに「あなたはこの論文を通して社会に何を言いたいのか」とよく聞かれます。都市工学の立場として、この研究によって社会をどうしたいかということが求められているのかなと。

奥澤：「仮説検証型」だとしても初めのテーマを決めるときには自分の興味や価値観が反映されているのではないかと思いますが、どうですか？

水谷：確かに最初は自分の興味や疑問から出発しますね。論文の中ではそこをあまり論じないというだけで。

3．研究のほかの活動

―デザイン系研究室ではプロジェクトでの活動にかける時間が大きいですね。実地での活動についてはどう思いますか？

道家：僕の研究室では、先生のスタンスとして実務と研究を完全に分けています。デザ研のようにプロジェクトの活動をどんどんやっていくのも良いと思うけど、それは社会人になってやれば良くて、大学ではサイエンスをやろうと。出口先生が関わっているアーバンデザインセンター（UDC）の活動も、やりたければやっても良いという感じで、僕もデザ研のプロジェクトに参加しています。

奥澤：私は研究とプロジェクトの対象地が同じなので特にその傾向が強いのですが、研究室としても研究とプロジェクトのどちらかに傾くのではなく両輪で回していこうと考えられているのをすごく感じます。

―デザ研もそれが理想とは思っていますが、実態としてはプロジェクトに傾いていますね。

箭川：自分が参加してきて、プロジェクトをやるなら何を学びたくてやっているかをはっきりさせてやらなければ意味がないと感じています。僕はあまりそこを考えず初めてしまったところがあって、何を学んだかと問われると難しいけど、もう少し後から分かるものなのかな。

道家：予想外に得るものがあったということもあると思います。僕は設計の経験をしたくてプロジェクトに参加しているけど、絵を描くだけじゃなく実現までのプロセスを経験することで、市役所の人を納得させる説明ができることが実は一番重要だとか、制約をどうくぐり抜けるかということを知り、すごく勉強になりました。

―プロジェクト活動の意義は基本的に理論と実践なので、今まで考えられてきた理論が現場でどう機能するのか、しないのかということを検証する機会として意識的に動くことが求められるとは感じます。

増田：そのような活動をしていない学生からすると、理想論かもしれないけど実地で携われる立場があるのは大事だと思う。都市はスケールが広い分、理論が実際にシステムとして実装されるときの乖離が大きいので、修士の２年間を理論の勉強だけに費やすと実務や実地と認識がずれていってしまうのではないかという懸念もある。

道家：ただ、頭ではプロジェクトに参加する意義は分かっていても、実際にやっていることがどうしても作業というか肉体労働的になってしまうこともあって。大学としてやりたいことをやるには行政や民間の手が回らないところを担わなきゃいけないという都合もあるのですが。単純な労働力にはならないように気を付けないととは思います。

―個人の研究以外の活動として他の人と協働で進めるものとしては、プロジェクト以外では輪講と大学院スタジオでしょうか。建設系３学科合同の「復興デザインスタジオ」には都市工から 10 名程度参加していました。

秋月：１年の秋学期に都市工が開講する大学院演習を、２年の夏学期に「世界の都市計画」という演習に参加しましたが、受講しているのはほとんど留学生で、特に内部進学した人はほとんどいませんでした。 学部の時に演習をたくさんやってきていたからかな。

増田：研究に集中したいか他の事も色々やりたいかという個人の考えによるんじゃないかな。研究に時間を割きたいならそれも良いと思う。

―輪講はどのような位置づけですか。

後藤：デザイン系研究室で言うプロジェクトに準じるものが近いかな。防災研が開講している輪講は外にはほとんど告知していない、研究室内の研究会という感じです。

増田：他のことをやっていないと輪講ぐらいはやらないと精神的にも辛いかなと思います。個人での研究だけをやり続けるのは、一カ月とかならいいけど年単位で続くときつい（笑）。交通研の輪講も基本的に研究室の人向けで、他の人はほとんどいません。

水谷：解析研は３人の先生がそれぞれ一つずつ、３つの輪講が開講されています。研究室の学生はどれかには参加している感じかな。

小原：広域研の輪講は、研究室のメンバーだから参加しなければいけないという訳ではなく、オープンに色々な人が参加しています。

秋月：計画研では研究室という単位での輪講などはしていなくて、自分でやりたい人は輪講を主宰したり課外活動に参加したりしています。そもそも研究室自体が共同体として他の研究室よりゆるく繋がっている感じです。

4．私たちの先にある職

―ここからは都市工で学んできた私たちが何を目指すのかということについて話したいと思います。参考として、同窓会 50 周年記念行事の際に同窓会名簿を基に作成された卒業生の 10 年後の就職状況の集計から、都市工学科が設立されてすぐの 1966 年および 2008 年の卒業生の就業先をグラフにしました。都市工学科は中央官庁や地方自治体にてプランニングを担う人材を排出することが見通されていましたが、その傾向は弱くなってきています。

増田：官庁が敬遠されるようになったのは、業務内容だけではなくあまりにも激務だからという理由があるように思います。

秋月：学部の時は就職先として官庁もいいかなと考えていましたが、結局は民間企業を選びました。新しいことをするときに制度が必要というの面もあるけど、現場にいた方が挑戦はしやすいイメージはあるし、民間から中央官庁に働きかけることもできる。民間でもできることはいろいろあると思います。

道家：就活で中央官庁の人に話を聞いていた時に「僕たちにできないことはないんだよね、制度を作れば何でもできるから。」と言われて、すごいなとは思ったんだけど、実際の事例を見ていると最終的に動かしているのは民間の企業だったりする。僕自身は民間への就職を選びましたが、最初に一番現場に近いところをやってみたほうが実情が分かるかなと思った。

箭川：都市工ができた当時と今ではまちづくりに対する考え方が大きく変わっています。当時は今よりもトップダウンでの施策がやりやすく、統一された理論として学んだことがそのまま展開できることが多かった。一方で、今はタクティカルアーバニズムの取組が活発なように、一律の制度ではなく、その場所に合ったできることをやるという考えを持つ人が増えている。官庁でできることの限界を感じている人が多いんじゃないかな。

後藤：都市工も確かに最近は小さいスケールの話になることは多いけど、この学科に求められてるのはそこなのかとは研究室でも議論になります。大学だからこそ、国や全体のスケールで考えられる人材を育てるべきなんじゃないかという気もしています。

小原：それは僕の研究室でも言われていて、広域の視点を以って、公的な立場だからこそできることを自分たちがやるべきなのかという話をしています。

―日本では都市計画家という職業が確立されてこなかったことも就業先が変化している一因だと思います。これから都市計画家という職はどこに位置付けられると思いますか。

箭川：個人の意見としては、「都市計画家」と明確に肩書を持たなくても、各々がしっかり考えを持った上で自分が働ける所に勤めて、その上で都市計画の考え方を広めることに意義があるんじゃないかと思う。複数の街区があったとして、それぞれの街区ごとに良いものを目指すというのが現状の資本主義的な考え方だけど、都市計画を学ぶと複数の街区を関連付けて全体として良くなるようしようと考えるようになる。啓蒙と言ってしまうと高慢だけど、そのような考え方を広めて、都市計画そのものの存在する意義を色々な立場から伝えていくことが必要なんじゃないかと思います。

道家：仕事の価値が理解されていないからそれに対してあまりお金が払われないというのはある。名前が出るような建築家とかが仕事をできるのは都市計画のお陰でもあるけど、それは世間一般には認識されていないですよね。

―職に就くということへの考え方も変化しているのではないかと思います。就職を将来のためのステップの一つと考える人も増えているのではないでしょうか。

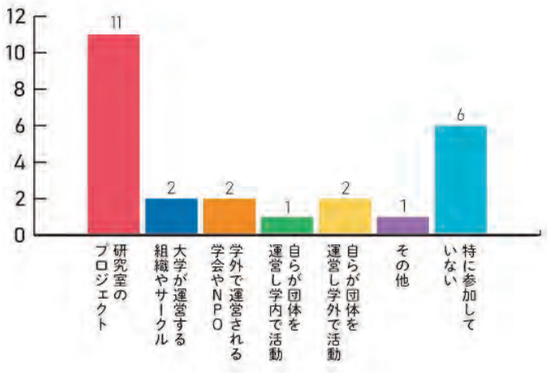
箭川：僕は都市や建設と直接には関係のない企業に就職しますが、将来は何か面白いことをやろうとしている人たちをビジネスの面からサポートできるようになりたいと思っています。そのために就職して身に着けたいものが３つあって、１つ目は「自分がこれができる」という能力。２つ目は「どこで何をやってきた」というような認められるためのクレジット。３つは資本。単純に僕は自分に余裕がないと新しいことには取り組めないと思うので。都市の情勢を見つつ、良いタイミングでやりたいことをできるといいなと思います。もちろんそれだけを考えて就職先を選んだ訳ではなく、他にも理由はありますが。

後藤：僕も割と考えが近くて、将来的には転職も視野に入れています。仕方がないとは思うけどまだ全然技術が足りてないなという気持ちがあって。経験を積んだ後は大学に戻るのも、被災地とかに行くのも選択肢として考えています。その幅を広げるという意味で就職先を決めました。

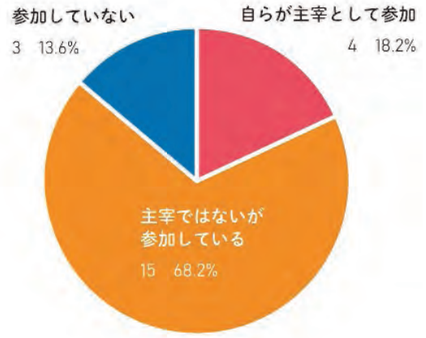
―大学院を経てもやはり技術には不足があると思いますか？

後藤：大学院に入ってからは、学部の頃よりもある分野について専門性をもつことが求められましたが、都市計画を学んだ人が職業として求められていることは、いろいろなことを知りいろいろなことを判断して計画を立てるということだと感じます。そこの技術を身に着けるには実務に取り組むしかないという気はしていて、そういう意味で技術が足りないと言いました。研究と実務に乖離があるのは仕方ないと思うので。

Q４．授業外での活動の参加状況は？（複数選択）



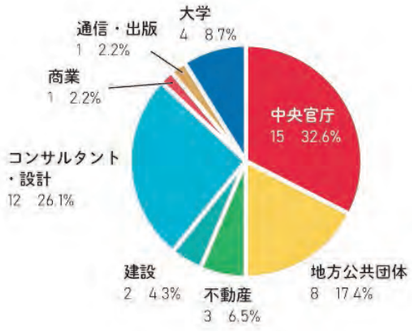
Q５．輪講への参加状況は？



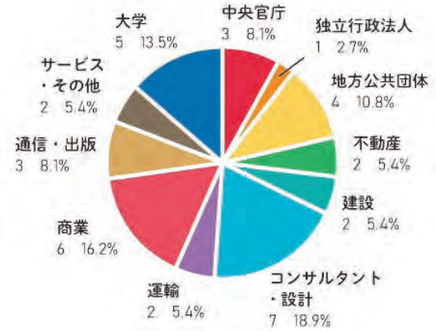
参考：都市工創設期と近年における卒業 10 年後の就業先

＊1966 年分は同窓会 50 周年記念行事の際に都市工学科同窓会名簿をもとに集計されたものを、2008 年分は同様に筆者が集計したものを図化。
＊計画コースおよび環境コース学生を含む。
＊名簿上で就業先が確認できたのは 1966 年卒が 46 人、2008 年卒が 37 人。

【1966 年卒業生】



【2008 年卒業生】



秋月：実務ではプランナーとして様々な人の間に立って「都市計画は知らないけどビジョンは持っている人」などと話しながら街を作るということになりますが、そこで役立つような技術は実務をやらないと分からないものだと思います。

5．都市工学科で学んだことは何か？

―最後に、都市工学科で何を学んだと思うか、一人ずつ聞かせてください。

奥澤：都市を学ぶ者としての視野とか視座とかは自然と身についているなと思います。都市工の人と話していると、「これはいいよね」とか「それは問題じゃないか」とか、何となく共感できることが多い。より良い暮らしをつくるための手法を考えたり、価値観の面ですね。

増田：僕も少し似ていて、現状に対して問題意識を持てるようになったと思います。 都市工に入る前は「マンション乱立」とかを聞いても特に何も思わなかったけど、今はそれが 10 年後にどういう影響があって何が問題なのかということが言えるようになっている。そういう意味での判断力が身についたと思います。

水谷：都市工は他の学科に比べて将来どうなるかを想像して計画を立てるなど、将来に目を向けることが多い。未来への視点は身についたと思うし、社会に出ても役立つのかなと。

後藤：僕も将来への視点や問題意識については学んだことだと思います。一方で、現実を的確に捉える方法については不足があったかなと。何かを提案することを求められてきましたが、その提案が正しいということを示すために現実を分析し、両者をすり合わせるということはあまりやってこなかったんじゃないかな。

箭川：どういうことが伝わりやすくてどういうことは伝わりにくいかという伝え方の重要性を学びました。 また、集団の中で自分を捉え直す機会が多く、自己認識が上手くなったかと思います。都市工にはいろんな人がいてグループワークも多いので、その中で自分がどういう立ち位置かとか、何ができて何ができないかとか、そういうことを考える機会が多かったなと。

小原：いろんな要素を考慮するような姿勢は都市工の特徴だと思います。意外と一般には自分の考えしか取り入れない人が多いなと感じますが、都市工の人はいろんな意見を持ってる人がいるということを経験的に分かっています。視野を広く持てるというのは皆が思うより貴重な人材だと思う。

秋月：都市工は使う言葉が所謂専門的なものではないから、いまいち専門性が分かりづらいというところもあると思います。例えば化学系だと物質名のようにほとんどの人には分からない言葉を使うけど、都市工では「にぎわい」とか「市民参加」とか、専門外の人が聞いても大体の意味が分かる言葉を使う。ただ、就活でグループディスカッションとかをしていると、同じ言葉を使っていても、その奥に含蓄されているものは都市を学んできた人とそうでない人では違うなと思う。意識とか経験とか、少しかもしれないけど培われてるんじゃないかな。

道家：皆の話を聞いていると専門的なスキルが挙がらないのが面白いなと思います。でも僕はそれは特に問題ではないと思っていて、考え方のように汎用性のあることを身につけられたなら都市計画を離れても生きていけるんじゃないかなとも思う。個人的には都市計画や建設は 60 年代とかに比べると明るい時代ではないと思うし将来に一抹の不安は感じてはいます。都市工で学んだことは他の分野の仕事でも応用できそうな気がするので、それが特徴かなと思います。

箭川：自分の勉強不足もありますが、確かにツールとか資格とかのスキルは他の大学院生に比べては身についてはいないと思います。あと都市工では様々な制度についても学びますが、自分が都市で何かをしたいと思った時に実際どの制度をどのように使うのが良いか、ということまでは分からなかった。それは自分でも意識して学べたら良かったかなと思います。

奥澤：研究室にコアタイムがなくて自分で研究の進度をコントロールする必要があったり、ツールの使い方は自主的に学ぶ必要があったり、勝手に身につくものがないというところは少し大変だなと思うときもあります。

―私たちはツールとかのスキルに関しては独学でやろうと思えばできてしまうところもあるので、それに授業を使うのはもったいないというように取捨選択がされている気もします。カリキュラム上で技術や計画のプロセスをはっきりとは学ばないことについてどう思いますか？

後藤：社会基盤学科の人とかと話していて、すごく合理的に答えを出すプロセスを知っているなと思うことがある。それはすごいなと思う一方で、あんまり面白くないなとも思う。都市の未来について考えるとき、現実にないものを考える力も求められていると感じるので、面白さという点では確固とした技術やプロセスを学ばない理由が分からなくもないかな。

道家：確かにプロセスから発想が規定されてしまうということはありますね。

奥澤：この間、都市計画を学んだ人が起業すると長く続く、という記事を見ました。何かを発想して実社会の合わせて物事を動かしていく力は強いのかも。

―他分野との交流についてはどうでしょうか。

水谷：学部の頃は環境コースの授業も受けていたけど、今は関係することがほとんどない。環境系の分野も関係することはあるし、一緒にできることはやれるといいと思う。

秋月：都市工が主導することじゃないかもしれないけど、経済とか心理とか、他の学部と一緒に何かをやってみたりもしたい。学部が違うと思想も手法も違うから、すごく難しくはあるんですけど。

小原：僕たちは空間と言いながら地面の下とか人が住んでいない農地や山とかについては何も分かっていない。そういうところを扱う分野との交流もあるべきだと思う。

箭川：そう考えると都市工の学生だけの演習に少し疑問を感じてくるね。違う研究室とはいえ根底では同じような問題意識を抱えているし、専門性とかスキルに関してもそこまで差がある訳でもないし。研究室の外だけじゃなくてもっと広い範囲を見ていかないと行けないんじゃないかな。

奥澤：そういうように他の分野と協働しようという発想が出るところが、既に都市工らしい気もします。他学科との合同スタジオの経験から言うと、都市工の人は個々の提案を結び付けたり、一つのストーリーに落とし込んだり、議論をまとめることは比較的できるように思いました。

―確かに異なる立場の人々と協働する重要性を理解している分、誰かと何かをやりたいと思ったときに人を集め、全体をまとめあげる力はあるように思えますね。

以上で座談会を終わります。皆さんお忙しい中ありがとうございました。

座談会を終えて

text_MAEYAMA /M2

それぞれが専攻するテーマと同じくらいに、研究の進め方において大きな違いがあることが分かりました。教育と並んで大学の根幹である研究へのスタンスはそのまま研究室として何を重視しているのかという思想につながり、研究室としての「都市工学はどうあるべきか」という考えを反映しているように思います。また、違いを確認する一方で、共通の背景を持つからこその会話のスムーズさや発言への共感も見て取れ、「考え方」や「態度」を身に着けるという都市工学科の特性を改めて感じました。　将来については、都市工学専攻の学生として技能や責任をもった自分と、一人の人間として生活をする自分とを持つ中で、現実的に自分にできることを探る " 今の学生 " の等身大の姿で話をしていただきました。

改めて、依頼に快く応えてくれた座談会参加者の皆さま、ならびにアンケートに協力して下さった皆さま、誠にありがとうございました。修了後はそれぞれの立場で都市に関わっていくことと思いますが、同時代に学んだ者同士として都市工学や都市計画についての考えを時々でも話せるような関係を築けていればいいなと考えています。

都市デザイン研究室の長短を自省する

What's pros and cons of the Urban Design Laboratory?

text_OTAKE / M1

都市デザイン研究室 (以下、デザ研) は現在総勢 40 名を超える、都市工学専攻 (以下、都市工) の中でも最大規模の研究室である。ここに集ったメンバー達はデザ研に何を期待し、門戸を叩いたのか。個性豊かな教授陣か、多彩なプロジェクトか、研究成果の蓄積量か……。また、晴れてメンバーとなり研鑽を積む中で何に手ごたえを感じ、苦悩しているのか。実空間での実践？地域の人々とのやりとり？限られた研究時間？

こうした各メンバーの声に耳を傾けることで、デザ研の強み・弱みを炙り出せるのではないか。ここでは外部からデザ研に入った修士の学生と、学部から一貫してデザ研に所属している博士の方にお話しを伺った。他研究室との比較に続き、デザ研の特徴を内部の声から探る。

修士の学生に聞く

インタビュー対象者	氏名 学年 学部での所属 研究対象	小田島啓太 M2 農学部緑地環境学専修 イノベーション	藤原大樹 M2 農学部緑地環境学専修 社宅集積地
	松本大知 M1 工学部建築学科 手賀沼	砂川良太 M1 早稲田大建築学科 漁村集落	西野一希 M1 農学部緑地環境学専修 駅	宗野みなみ M1 横国大建築学科 歴史的街並み

どうしてデザ研へ？

デザ研を志したきっかけは十人十色だ。

建築学科出身の宗野さんが都市に向き合う初めての経験は建築設計課題。対象地域のリサーチや、提案するプログラムを考えることの楽しさに触れ、建物を建てるよりも街をどうするかの方に興味を持つように。そこで見つけたのがデザインもしつつまちにもかかわることが出来るデザ研だった。

松本さんも建築学科出身だが、千葉研究室に所属し、建築学科ながら都市へのアプローチを行っていた。ただ、地域特性を設計に活かすことが主眼で、自分の良いように利用してしまうのではと疑問を持っていた。より客観的に課題を認識し、設計から使い方まで取り組めるデザ研に関心を持ったそうだ。

砂川さんは学部 2 年生の時にかつてデザ研にいた Dimmer 先生の講義で東京の都市計画に触れた。東京に向き合いたいと思った時に、現場のリサーチが強く、研究室の蓄積もあるデザ研が目に留まったそうだ。

西野さんは元々都市の中の緑に興味があり、学部は緑地環境学専修だったが、都市計画的なアプローチに関心を持つように。手賀沼 PJ では自分で設計したものが実空間になることにも魅力を感じたそう。

藤原さんは西野さんの先輩に当たる。緑地環境学専修では調査研究が主だが、実空間の整備に関心を持つようになり、PJ を持つデザ研に興味を持ったそうだ。

小田島さんも藤原さんと同じ緑地環境学専修出身。緑地計画の研究をしており、当初は環境デザイン研究室を見ていたが、外に出てまだ見ぬ世界にも飛び込みたいと思い、PJ のあるデザ研を選んだ。

PJ での実践的なデザインと調査研究という、まちへのアプローチの多様さが魅力となっているようだ。

研究の主体性

デザ研の特長としてまず聞かれたのは PJ や研究の主体性だ。自分自身が持つ展望・問題意識に基づいて活動しており、ミーティングも学生が主体となって運営されている。「グループワークが上手なことに驚いた」と宗野さんは言う。スケジューリングや議論のまとめなどをコントロールするのが上手いそうだ。

こうした研究活動を進める主体性は演習で培われてきたのではないかとの声が聞かれたが、デザ研の PJ でもこうした力は養われるように思われる。

学生と教員の距離感

次に聞かれた特長は学生と教員の距離感だ。デザ研には農学部緑地環境学専修出身の学生が多い。彼ら曰く、デザ研は農学部よりも先生と学生の距離が近く、より気軽に、率直な意見交換ができるそうだ。内部生が臆することなく先生方と積極的に議論することに驚くことも多いそうだ。

この要因は、学生が過ごす 906 号室に永野助教が共にいるからではないか。学部での演習のように学部生の頃から先生と直接議論する経験を積んでいるからこそ、こうした積極性が得られるのかもしれない。

多様なバックグラウンドを活かした議論を

一方でデザ研に入った当初は学部生の頃の学科と議論の焦点が違うことに戸惑いも感じたらしい。研究室会議では時間が無いこともあり先生方と学生の議論が中心になっているが、異なるバックグラウンドを活かした学生同士の多角的な議論をしたいとの声もあった。こうした場はすぐにでも設けたい。

定性的な議論の危うさ

デザ研に入ってからの違和感としては定性的な議論に陥りがちな点が挙げられた。小田島さんは「定性的な議論では都市工学科の価値観にフィットする方向に議論が流されてしまう虞がある」と指摘する。特に農学部では定量的な調査が基本であり、都市工学科や建築学科の学生に定性的な議論が多いことに疑問を感じるそうだ。

自分の掲げる理想像を図面で示す

建築学科との違いとしては個人の掲げる理想像の強さが挙げられた。建築系の人は自分の意見を強く持っている一方で、都市工の人は色々な人の意見をまとめる方向で議論を進める傾向にあるそうだ。

しかし、「議論をまとめるだけではなかなか前に進まない。自分の意見をはっきりと示して、周りに訴えかけることも必要」と松本さん。図面を示すことで市に訴えかけ、前に進んできた手賀沼 PJ のような取り組みもあると、相手に自分の考える理想像を示すために図面をしっかりと描くことの重要性が指摘された。

様々な要素をまとめる力

デザ研の弱さとしてまず挙げられたのは定性的な議論に終始してしまうことが多いことだ。ふわふわとした掴みどころが難しい抽象的な議論に不安を覚える声は内部進学者の間でも時折聞かれる。

これに関連して、「自分達の専門性とは何か」をはっきりと言えないことを打ち明けると、「色々な要素をまとめる力」ではないかとの答えが返ってきた。「抽象的なプラン・システムと実空間のデザインをつなぐ役割があるのではないか」と松本さんは言う。例として挙げられたのは学部 3 年の集合住宅設計演習。3ha ほどの敷地に集合住宅と公共施設等を設計する内容だが、周辺地域の課題と資源を読み解きコンセプトを定めることや、使われ方のプログラムも含めた提案が求められる一方で、建物の意匠や構造設計の細かい点までは設計する時間もスキルも無く、曖昧になってしまうことに多くの学生が悩んでいる。実際にこうした細かい点まで一人で設計することは無理だが、そこを担当する専門家に設計のビジョンを示すことが我々の役割なのではないか。

さらに、今後はこうした役割の重要性が増すのではないかとの声も聞かれた。「行政予算が最低限の住環境保障だけではなく都市におけるクリエイティブな活動や提案に、より多く充てられる時代がこれから来るのでは」と宗野さん。プレイスメイキングのような空間の「使い方」へのより積極的なアプローチ、すなわちモノのデザインに加えてコトのデザインの試みが盛んになっていることは、従来の規制を中心とした都市計画が変化してきている端緒だと考えられる。

こうした社会変化に際して、都市計画家には周囲の人を巻きこんでいくスター性が求められるのではないか。そこには公共性とのジレンマがあるが、そこを突破するために、社会実験を行っていく現在の試みがあるように思われる。クリエイティブなものが求められる今だからこそ、自分なりの意見を強く持ち理想像を示すことの重要性が高まっているのではないか。「専門性が無いのではと不安になるのは相手から求められていることしかやっていないからでは」と西野さん。自身の都市への想いを自信を持って発信することの大切さを感じた。

博士の学生に聞く

インタビュー対象者	氏名	三文字昌也
	学年	D2
	学部での所属	工学部都市工学科
	研究対象	台湾夜市

どうしてデザ研へ？

黒瀬先生、中島伸先生の影響が大きいと三文字さん。学部３年生の時から演習を中心にお世話になったそうだ。４年生の時に台湾へ１年間留学した経験から卒業制作対象にしたいと思い、助教の先生方の影響もありデザ研を選んだ。

デザ研は先生が多く、色々な方の話を聞けることに特に魅力を感じたそうだ。当時は西村幸夫先生、中島直人先生、黒瀬武史先生、中島伸先生、森朋子先生、Cristian Dimmer 先生の６人もの先生がいらっしゃった。ここまで多くの教員を擁する研究室は珍しい。

PJ の自主性

研究室では学部生の頃に自身が立ち上げた本郷 PJ での活動がメインだったそう。本郷 PJ は 2015 年に菊水という根津の銭湯が廃業したことに三文字さんが危機感を覚え、当時本郷に下宿し、菊水を普段使いしていた都市工同期と共に活動を開始。銭湯の建築的保存や利用者の調査、周辺の風呂無し住居の集積状況の調査などを行っていった。次第に都市工の先生や文京区、企業の方が集まるようになり、PJ としての形に。最近は歴史的物件が廃業する前になんらかのアプローチを行うべく、ヒアリングやワークショップなどを行っている。

研究室での PJ のほとんどは行政や NPO などとの提携を基にしており、本郷 PJ のように自主的な活動は限定的だ。この自主性の不足に対して、「参加する PJ を自分で選んで頑張っているのはとても良いと思うのですが、でも提携先に与えられたことをやっているだけになりがちで、それはコンサルティング企業と役割が変わらないのではないかな」と三文字さんは疑問を投げかける。自分で予算を確保し、物件を取得するなど、学生が主体的に PJ を進めることでしか出来ないこともたくさんあるのではないだろうか。

「研究室の枠にとらわれずに、もっと一つの地域に入り込んでみても面白いよね」とも語る。PJ の対象地域に移住する人もいるように、デザ研を卒業した後もまちに関わり続ける可能性を示唆してくれた。

自信を持って周囲の人を巻きこんでいく

まちにアプローチするためには周囲の人を巻きこんで動かしていくことが必要不可欠。そのためのツールが綿密なコンセプトだと三文字さんは指摘する。都市の歴史や資源に根差し、細かいイメージまで落とし込んだ綿密なコンセプト、すなわち都市の歴史から活用までのストーリーで以って住民や行政の方々に自信を持って訴えかける。こうした人を巻きこんで動かしていく力は都市工やデザ研の持つ専門性とも言えるのかもしれない。

この時に欠かせないことが「都市から得たものでストーリーを描く」ことだと併せて三文字さんは語る。まちの人に自信を持って提案をするためには、歴史的事実に立脚した上でまちに対するスタンスをはっきり持つことが大前提。こうした裏付けのある自信を持つことで初めてまちの人の心に届くのだろう。「自分は都市にどう向き合うのか語り合う飲み会をしたいですね」と三文字さんは言う。

研究成果の発信

加えて、研究成果を蓄積し、世に発信することの大切さも指摘する。「本郷に関するヒアリングを受けることも多いのですが、似たような質問も多いんですよね。各地域に研究体を設けることもデザ研の役割なのかもしれない」と三文字さん。PJ での研究成果を梗概にまとめたり、各地域での研究を蓄積・発信することが必要だ。

また、留学生との関わりがもっと欲しいとの声も聞かれた。互いに遠慮無く、外部から来たからこその視点での意見を吸収したい。

最後に、「研究室がもっときれいになってほしい」と三文字さんは笑った。

都市の将来像を責任を持って示す

今回のインタビューでは「プランナー」集団としてのデザ研の性格が垣間見えたのではと思う。PJ などでまちの人と直接関わっていると、共感していただけるときや意見が合わないとき、そもそもあまり関心を持っていただけないときなどがある。そうした中でも自分達が都市から読み解き、そこに立脚して描いたまちの将来像を根気よく、責任を持って示し続けることが、人々を動かしまちの転機に趨勢を変えるためには必要なのかもしれない。

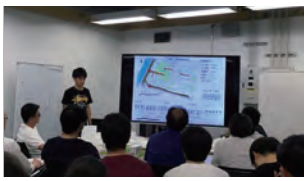
M1　都市工学科出身　應武遥香

Information

夏休み前のこの時期はジュリーやレポートなど締め切りに追われます。夏休み中も研究室旅行、プロジェクトでの調査にインターンなど、濃厚な日々が続きそうです。

Hey listen, -ちょっと聞いて！

7.16　B3 集住設計、ついに完結！



都市工名物、集住設計。３ヶ月間洗練された設計案が最終発表を以て画竜点睛。魂の籠った作品の数々に、先生方からも熱い講評を頂きました。(M1 西野)

7.20　小高の明日を考える集い

住民の皆さまに小高 PJ でのこれまでの取組みの報告や、B4 オムニバス演習の成果発表を行いました。新体制での新たな小高 PJ が今後動いていきます！ (M1 應武)

7.29-30　修士研究ジュリー

都市計画コース全分野の先生に研究計画をプレゼンし、研究室会議での議論とは異なる視点から、鋭いご指摘やご意見をいただきました。(M1 宗野)

7.30 14 号館屋上で暑気払い

ジュリー後に 14 号館屋上で暑気払いを行いました。ジュリーからの開放感からか皆さん顔が明るかったです。調査に旅行、それぞれの夏の始まりです！ (M1 應武)

7月の Web マガジン

http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

7.6 ヘリテージまちあるき開催

50 のヘリテージのうち、主に４つを見て、WS で意見交換もしました。今秋にもまちあるきを開催します。(M2 藤原)

7.19　夏季修士・卒業論文審査

夏季修了の B4 園部、M2 中戸が審査を通過。無事卒業となりました。概要を Web 記事に掲載。(B4 園部、M2 中戸)

8月の予定

Lab Meeting
夏休みのため、会議はありません

1st-2nd	富士吉田 PJ 旧郵便局改修 WS
7th-9th	研究室旅行
11th-13th	手賀沼 PJ 夏祭り
11th-17th	小高 PJ 塚原海岸アートイベント
26th-27th	富士吉田 PJ 火祭り
26th-31th	三国 PJ 現地調査
29th-30th	小高 PJ まちなか菜園講習会

編集後記

先日の梅雨明けまでは雨振りの蒸し暑い日が続いていた。湿度が高いと汗が気持ち悪いし雨はいろいろと不便だし嫌いだ、という人が多いと思うが、私は湿度が高いのも雨が降るのも好きだ。日本の中でも特に湿潤な土地で育ったからかなと自分では思う。でも時々、皆の「雨が嬉しくない気持ち」を自分も共有しないといけない気がして思っていないのに「雨が嫌だ」と言ってしまう。いつか、それが相手にも雨にも悪いと思い「本当は雨は結構好きだ」と伝えたことがある。「そうだと思った」という答えが返ってきた。(M2 前山)